
命の価値が平等だとしたら、はたして自分と言う存在に意味があるのか

安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の価値が平等だとしたら、はたして自分と言う存在に意味があるのか

【Nコード】

N8832M

【作者名】

安藤ナツ

【あらすじ】

命の価値ってどういう意味？

そんなことを話す女子高生と本屋の店主は好きですか？

(前書き)

長いタイトルって、目につきますよね？

この作品は、『自分を信じる』とは、最も重い足かせであり、最もきつい鞭打ちであり、最も自由な翼である『の感想から生まれた作品です。』

「ふー、やっと夏休みだよ。店長」

「そうかい。本屋に休みはないけどな」

「開店休業状態じゃん」

「うるせーな。明日から本当に閉店にするぞ」

「それは困る。ここクーラー効いてるし、店長の読んだマンガ読めるし、コンビニ近いし、携帯充電できるし、駅近いし便利なんだよね」

「ねえ。ここ、おまえん家？」

そんな馬鹿な会話が繰り返られる駅前の本屋。時刻は昼を少し過ぎたところで、小野は高校の始業式を無事に（一度貧血で倒れたことがある）終え、昼食を友達と取った後、いつものように一人で店主の顔を見に来ていた。

見に来られた店長の方は、白い着流しを崩した格好で身につけ、レジの置いてあるカウンターに座りながら素麺を啜っていた。ザルに盛られた白い麺と、ガラスの器に入った透き通る麺つゆは、いかにも夏と言った風情があっただが、本屋で見る光景ではなかった。

「しかし、夏休みね。真面目に学校なんて行ってなかったから、一度でいいから夏休みしてみたいな」

「どんな願望よ。年中夏休みでしょ？」

「ちげーんだって。『校長の話が長かったね』とか、『夏休み短期のバイト入れた』とかあるだろ？ お前みたいに友達と海行くとかさ。俺、友達とかマジで片手で数えるくらいしかいなくてさ、そんな話」

「なんて寂しい青春！ ちなみに、今回の校長の話は二十二分四十七秒だった」

「畜生！俺にはそれが長いのか短いのかすらわかんねー！」

素麺を食べる手を止めて、店主が真剣に頭を抱える。そんな店主を見て、小野は少しだけ人に優しくなれそうになった。

「うーん、過去最長記録に遠く及ばないけど、結構長いんじゃない？なんか『自分の命の価値を考えて行動するように』とか『ボランティア活動に積極的に参加して、平等や慈愛の精神を身に着けよう』とかそんな話よ」

「ふーん。面白くもなんともなさそうな話だな」

店主は顔をあげ、刻み葱を箸でつまんで麺つゆに落とす。

「まあ、眠たくなる話だったわね。暑いから眠れるもんじゃあなかつたけど」

「ふーん、しかし命の価値と来るか。一体全体、命の価値って一体何なんだろうな？」

「そりゃあ、生きてることじゃあないの？」

「そりゃまたどう言う意味だ？」

「質問に質問で返しても文章って続いていくんだ、不思議だよ。で、なんだったけ？ああ、命の価値だっけ。命の価値ってそりゃあ、『生きてる』ってことでしょ？だって命をたくさん持ってても、死んでるんなら意味ないじゃん」

「なるほど。命ってのは電池みたいなものだ」と

「そうそう。電池が切れると死んじゃう。ご飯を食べて、充電！みたいな感じ？」

「なんだ、素麺欲しいのか？」

「あーん」

「残念がら、この素麺は一人前なんだ」

小野の口元まで運ばれた素麺が、急遽Uターン。白い十数本の素麺が店主の口に吸いこまれる。

「でもよ、それは命の価値じゃあないんじゃないか？」

「え？」

「だって、命だけ持っても、それを使える機械がないと意味がないだろ？」

「それって、命だけじゃあ動けないってこと？」

「そう。動くのは身体であって、命じゃあない。生きているのは身体であって、命じゃあない」

「うーん。たしかに、生きていることに、命は関係してるけど、『命が生きてる』とは言わないよね。命の価値は生きている事とは関係ない？ でも、やっぱり命って言うのは電池みたいなモノだと思うんだけど。命、いのち。うーん。命の価値……ねえ、価値ってそもそも何？」

「お前は話を凄い勢いで進展させていくな」

店主はカウンターの上のiPhoneを取ると、辞書のアプリを起動させる。辞書は最近元万引き中学生に全部上げてしまったので、この店にはない。

検索結果は以下の通りだった。

1. その事物がどのくらい役に立つかの度合い。 値打ち。「読むのある本」「のある一勝」

2. 経済学で、商品が持つ交換価値の本質とされるもの。 価値学説

3. 哲学で、あらゆる個人・社会を通じて常に承認されるべき絶対性をもった性質。真・善・美など。

「一つの言葉に三つもの意味があるよ。ややこしいな」

「まあ、上から考えて言ってみるか。1は、どれくらい役に立つか、

か。命って何かの役に立つものなのか？」

「まあ、生きるのには役に立ってるわね」

「話が戻ってるぞ」

「うん。でもやっぱり命って言うのは、エネルギーで、生きてるのに必要なものだと思うの。違うかな？」

「俺的には、さっき言ったみたいに違和感あるな。何処まで行っても、生きているのは身体であって、命じゃあない。命って言うのは生きている状態を指す言葉じゃあないのか？」

それは逆じゃあないのかと小野は首を捻る。命の有る状態を生きていると呼んで、無い状態を死んでいるという。生きている状態を命があるというのは、どうにも逆転しすぎて意味が通じない。

「だって、人間が『命』って単語を考えるはるか前から、人間は生きてるんだ。どうして生きているのかと言う疑問の解決のために『命』って言う概念を搾り出したんじゃあないのか？」

「そう言われると……そう思えてくるかも」

「命ってのは都合のいい解釈であって、答えではないと思うな。そうやって思考停止するのには役立つかもしれないが」

「じゃあ、命は生きるのにやっぱり役に立ってない？」

「かもな」

「……………頭が痛くなりそう。2に行こう、2に」

軽く左右に頭を振って、小野はiPhoneの画面を覗き込む。

「経済学で、商品が持つ交換価値の本質とされるもの……わけわからぬだよ。よつするに、何円つけてもいいかってこと？」

「そういうことかな？ 幾らまでなら払えるかって言う基準か……」

俺も経済は全然わからん」

「本屋経営してるのに？」

「お前だつて生きてるのに命の価値を知らないんだろ？」

「それとこれとは全然全く持って違う気がするのだが……小野はとりあえず無視しておいた。」

「命に値段をつけるなら幾ら？　つて、言われても。ねー、店長」

「ああ、値段を決めようにも命の価値がわからねーからな、つけようが無いぞ」

「つてか、値段の価値なんていい加減この上ないよね。友達が十二万のバッグを三万で買ったって喜んでたけど、そうなるとき、そのバッグの価値は、十二万なの？　三万なの？」

「うーん。別に傷があるわけじゃあないんだよな」

「うん。新品。でもコネとかなんとかで、四分の一価格」

「確かに、値段としてはお得だ。でもはたして、その価値は十二万円と同等なのか？」

「それとも、元々三万円の価値の物を、十二万として売っていたのか？　だね」

唇に右手の人差し指を当てて、小野は考えていますとポーズを取る。

薬味を麵つゆに入れた店主が、それをみて楽しそうに笑った。

「だな。金額の価値なんて何の指数にもならないな」

「なんか楽しそうだね」

「今までお前は頷いてるだけだったからな。会話っていうのはやっぱり楽しい」

「……友達作るうよ」

褒められた照れ隠しに、小野はそっぽを向く。もちろん、そんなことを繊細に気にする店主ではなく、「次は3だな」と勝手に話を

進めていく。

「なんだかこれもいまいちわからねーな。『哲学で、あらゆる個人・社会を通じて常に承認されるべき絶対性をもった性質。真・善・美など』か、要するに安っぽい言葉で言えば『真理』みたいなものか？」

「うーん。命の絶対的な性質かあ。一体なんなんだろう？ ってか、やっぱり命の意味がわからないとわからないよねー」

「俺の意見だと命に何の意味もないんだけどな」

「そんな意見、世の中の人に言ったら『屁理屈』って言われて終わりだよ」

「終わってるのは、そう言った奴の思考だよ」

「そりゃそうなんだけど……あ！」

「どした？」

何か重大なことに気が付いたと言わんばかりの小野の声に、店主は素麺を摘む箸を置く。

「そもそも、生きてるってどう言う意味なのかな？」

「んなもん、考えてたら夏休み終わっちゃうよ」

(後書き)

感想が励みにも力にもネタにもなります。

よろしければ、一行でもいいので感想をください。

この作品が面白いと思われたら、ほかの短編も読んでみては如何でしょうか？

長編も一日一回更新でお贈りしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8832m/>

命の価値が平等だとしたら、はたして自分と言う存在に意味があるのか

2010年12月31日22時44分発行